

人間を救うのは、人間だ。Our world. Your move.



日本赤十字社  
Japanese Red Cross Society



©Ibrahim Malla/IFRC

# 赤十字シンポジウム

報告書

RED CROSS SYMPOSIUM 2015

# 赤十字 シンポジウム

## 報告書

RED CROSS SYMPOSIUM  
2015



■日 時

2015年11月7日(土)

開場/13:30 開演/14:00 終了/16:00

■会 場

表参道ヒルズ スペース オー

東京都渋谷区神宮前4-12-10 (表参道ヒルズ本館地下3階)

■主 催



**NHK**

■後 援

外務省、厚生労働省、NHK厚生文化事業団

■協 力

赤十字国際委員会 (ICRC)、日本看護協会、  
商店街振興組合原宿表参道櫛会

■放送日時

2015年11月28日(土)

NHK Eテレ「TVシンポジウム」(14:00~14:59)

この報告書は、2015年11月7日(土)に行われた「赤十字シンポジウム2015」の  
ディスカッションをまとめたものです。

©Ibrahim Malla/IFRC

## RED CROSS SYMPOSIUM 2015



今回の赤十字シンポジウムは、昨年に引き続き、いまだに深刻な事態が続く中東の人道危機、とりわけシリアに焦点をあてます。

紛争と発生から既に5年が経過したシリアでは、避難民1,000万人のうち、国内にとどまらざるを得ない国内避難民は650万人 (UNHCR2015) にのぼり、国外に逃れた難民に比べて、支援はいつそう届きにくいとされています。さらに、武装集団同士の紛争の複雑化によって、国内避難民に支援を届ける活動ができるのは地元のシリア赤新月(赤十字)社等限られた支援団体のみとなっているのが現状です。しかもそのほとんどは、自身が紛争の犠牲者でもある地元ボランティアたちで、自らの命を危険にさらしながら人々の生活を支えています。そうした状況下で最も犠牲を強いられているのが、子どもや女性、老人などの脆弱な人たち。今回のシンポジウムでは、中東情勢に精通した学識者、ジャーナリスト、そして、現地で活動しているシリア赤新月のボランティアの声を拾い、紛争下の市民の5年間を振り返り、今、どのような支援が必要とされているのかを考える機会とします。この問題への関心が低くなり、いわゆる“Silent emergency(静かなる緊急事態)”となりつつある今だからこそ、一人でも多くの方がこの問題に注視する重要性もまた、訴えていきたいと考えています。





## 出演者プロフィール/PROFILE

出川 展恒 DEGAWA NOBUHISA

コーディネーター COORDINATOR



### NHK解説委員

1962年、東京都生まれ。  
1985年、東京大学教養学部教養学科国際関係論分科を卒業。NHK入局。佐賀放送局記者を経て、1990年から国際報道（主に中東、イスラム世界）に携わる。  
1991～92年、テヘラン駐在。  
1992～93年、旧ソビエト連邦・中央アジア独立国家を長期取材。  
1994～98年、エルサレム支局長（NHK初代特派員）。  
2002～06年、カイロ支局長（バグダット事務所長兼務）。  
2006年7月～現在、解説委員（中東・アフリカ・イスラム地域担当）。  
中東和平プロセス、アフガニスタン戦争、イラク戦争、国際テロなどをNHK特派員として現地から報道。中東・北アフリカのアラブ諸国の政変、イラン核開発問題、「IS=イスラム国」の問題などを、テレビ・ラジオで解説。現地取材も重ねている。

高橋 和夫 TAKAHASHI KAZUO

パネリスト PANELIST



### 放送大学教授

福岡県北九州市生まれ。  
1974年大阪外国語大学ペルシア語科卒業、1976年コロンビア大学国際関係論修士課程修了。クウェート大学客員研究員などを経て1985年から放送大学教授。専門分野は中東研究、国際政治。主な著作：『現代の国際政治』（放送大学教育振興会、2013年）、『国際理解のために』（放送大学教育振興会、2013年）、『世界の中の日本/グローバル化と北欧からの視点』（放送大学教育振興会、2015年）、『アラブとイスラエル/パレスチナ問題の構図』（講談社現代新書、1992年）、『燃えあがる海/湾岸現代史』（東京大学出版会、1995年）、『イスラム国の野望』（幻冬舎、2015年）など。  
<http://bylines.news.yahoo.co.jp/takahashikazuo/>  
（高橋和夫 Yahoo ニュース一覧）  
<https://twitter.com/kazuotakahashi>（高橋和夫 Twitter）  
<http://ameblo.jp/k-kazuo>（高橋和夫の国際政治ブログ）

玉本 英子 TAMAMOTO EIKO

パネリスト PANELIST



### アジアプレス・ジャーナリスト

東京都生まれ。もともとはデザイン事務所で働く会社員だったが、クルド問題に関心を持ったことがきっかけでジャーナリストの道へ。イラク、シリア、アフガニスタン、レバノン、ビルマなどを、テレビのニュースリポート、新聞、雑誌、ネット、小学校での平和授業や市民向けの報告会などを通じて伝える。シリアは2004年、2005年、アサド政権に弾圧された北部地域のクルド人たち、2013年からはハサカ県、アレッポ県で「IS=イスラム国」との戦闘や市民の暮らし、国内避難民などを現地取材。イラクでは昨年8月にISに拉致されたヤズディ教徒たちを中心に継続取材。  
共著に「アジアのビデオジャーナリストたち」、「21世紀の紛争・中東編」など。アジアプレス所属。京都精華大学非常勤講師。

渡部 正樹 WATABE MASAKI

パネリスト PANELIST



### 国連人道問題調整事務所(OCHA)神戸事務所長

2012年1月より現職。紛争や災害に苦しむ人々のための国際支援をより強化すべく、日本政府や市民社会とのパートナーシップ構築に取り組む。以前はOCHAニューヨーク本部でスリランカ内戦及び東日本大震災を担当。また、国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR)、国連人権高等弁務官事務所 (OHCHR) 及び海外経済協力基金 (現在の国際協力機構 (JICA)) にも勤務。人道政策、避難民支援、災害リスク管理、民軍調整等に携る。早稲田大学政治経済学部卒業。ロンドンスクールオブエコノミクス (LSE) 修士課程修了 (発展途上国における社会政策・プランニング専攻)。共訳書：新戦争論 (メアリー・カルドー著、岩波書店)。  
<http://www.unocha.org/japan> (OCHA HP)  
<https://www.facebook.com/OCHAKobe> (OCHA Facebook)

## 特別来日レポート



**ラガド・アドリ Raghad Adli**  
1989年シリアの首都ダマスカス生まれ。2012年から現在までシリア赤新月社でボランティアとして人道支援活動に従事。2015年8月よりシリア赤新月社ダマスカス支部で給水衛生事業担当事務局長として勤務。昨年のシンポジウムでも現地からのビデオレターの中で、人道支援の現状について報告した。千葉大学に留学経験があり、ダマスカス大学で日本語を教えていた。



**ラワン・アブドゥルハイ Rawan Abd Al-hai**  
1986年シリア紛争の激戦地の一つ、ホムスに生まれた後、ダマスカスで育つ。2010年から現在までシリア赤新月社でボランティアとして人道支援活動に従事。現在は救急隊チームリーダー。2012年よりシリア赤新月社ダマスカス支部で文書管理課長として勤務。

# 赤十字 シンポジウム

## RED CROSS SYMPOSIUM 2015

## Contents

### オープニング

#### ① シリア赤新月社ボランティア活動レポート

#### ② シリアと周辺の実況、子ども・女性たち

#### ③ 紛争下での人道支援

#### ④ 国際社会の中のシリア、支援を終わらせる日はくるか

#### ⑤ 会場からの質疑応答

#### ⑥ シリア赤新月社ボランティアのメッセージ

#### ⑦ 私たちにできること・まとめ



## ●オープニング

**出川:**皆様、こんにちは。出川展恒と申します。赤十字シンポジウムは、NHK海外たすけあいキャンペーンの関連イベントとして1987年から開かれています。今年で29回目となります。今回は、「失われた5年～中東人道危機と子ども・女性たち～」と題してお送りいたします。まず、最初にパネリストの皆様から、一言ずつ、自己紹介をお願いいたします。

**渡部:**国連人道問題調整事務所、OCHA(オチャ)と呼びますが、その神戸事務所長を務めております渡部正樹と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

私ども、国連人道問題調整事務所は、紛争あるいは自然災害の際に、被災者の命を守るための支援活動に携わっております。こうした人道支援には、さまざまな国連機関や赤十字組織、そして民間団体が関わっていますが、私たちOCHAは、こうした多くの支援組織のいわば取りまとめ役を担っています。現地で支援の重複やギャップが生まれないように調整するとともに、被災者に代わって、国際社会が取るべきアクションを訴えるということも私たちの使命です。OCHAの日本の事務所は神戸にあり、私が所長を務めています。どうぞよろしくお願いいたします。

**玉本:**アジアプレス記者の玉本英子と申します。アジアプレスというのは、フリーランスの記者のグループで、アジアを中心に30人ほどが活動を続けています。私は、20年前にクルド問題に関心を持ってから中東を中心に取材を続けてきました。イラクは15年、シリアは10年前から取材を始めています。イラクから2週間前に戻ってきたばかりですが、現地は今、非常に厳しい状況です。今も、苦しみや悲しみの中に人々が生きています。そういった人々のことを、今日は是非伝えることができたらと思っています。どうぞ、よろしくお願いいたします。

**高橋:**放送大学の高橋和夫です。シリアの情勢に心を痛める1人の人間として、今日こんなにたくさんの方が集まってくれたことを、本当に嬉しく思っております。ありがとうございます。もう一つ思っているのは、普段は誰もいないスタジオでテレビカメラに向かって話していますので、こんなにたくさんの人に見られていると、大変緊張いたします。どうぞ、よろしくお願いいたします。

**出川:**改めまして、今日、コーディネーターを務めます、NHK解説委員の出川展恒と申します。普段は、中東情勢の報道と解説をしております。今年のシンポジウムは、泥沼の内戦に陥ったシリア。そこで住む家を追われて「国内避難民」になった人たちに焦点を当てたいと思います。

現在、そのシリアの人口は、およそ2,200万人とされていますが、これまでに国外に逃れた人々、いわゆる「難民」は、およそ430万人と推定されます。このうち、ヨーロッパ諸国に向かった人々については、各国で大きなニュースになり、支援の必要性がこの秋にも叫ばれたところですが、ところが、シリアの国内にも、戦闘で家を追われ「国内避難民」となった大勢の人々がいます。その数は、現在およそ650万人と、難民の数を大幅に上回ります。経済的な理由、あるいはケガや病気など、さまざまな理由でシリアの国外に脱出できない人々です。一連の紛争が始まってもうすぐ5年が経とうとしているわけですが、戦いが一層激しく、複雑になってきて、シリアの国内の様子が報道も含めて、なかなか外からうかがい知ることができません。従ってその人々に対する支援の手も行き届かなくなっているわけです。



## ①シリア赤新月社ボランティア活動レポート

**出川:**激しい内戦となっているシリア国内で、目下、人道支援活動ができるのは限られた支援団体だけです。それは、国連の機関、あるいはシリアの赤新月社です。赤新月社というのは、イスラム圏における赤十字社のことです。そして、このシリアの赤新月社の活動を担っているのは、強い志を持った、地元のボランティアの皆さんたちです。今日はこのシリア赤新月社で支援活動に携わっている、シリア人の2人のボランティアにお越しいただきました。現地での活動の様子についてお話を伺います。最初に、ラガド・アドリさんです。ラガドさんには得意の日本語でプレゼンテーションをしていただきます。

**ラガド:**シリア赤新月社から参りましたラガド・アドリと申します。大学での専門は日本語で、2010年10月から1年間、日本へ語学留学に来ました。その後、2011年9月にシリアに戻り、その1年後、シリア赤新月社に参加し、3年間、シリア赤新月社ボランティアとして活動しています。



私の故郷シリアは、トルコ、イラン、イラク、ヨルダン、レバノンに囲まれており、広さは日本の半分です。人口は、およそ2,150万人で、ちょうど東京と神奈川の人口を足した位の数です。公用語はアラビア語です。シリア赤新月社は、国内14県の支部、68箇所の地域事務所があり、1942年からシリア全土で活動を行っています。



現在は、人道支援のニーズがとても高く、マンパワーが大変重要となっており、ボランティア3,072人が活動をしています。



まさにボランティアに支えられて活動しているという組織です。

紛争の中での活動は、命を守り基本的な生活を守るために、最前線から一般の人たちを安全な場所に避難させることから心のケアまで幅広くサポートしています。

シリア赤新月社の主な活動である災害マネジメントと心のケアと救急活動について、私と同僚が紹介させていただきます。



一つ目の活動は、災害マネジメントと呼ばれ、生きるために必要な水や食べ物の配布などを行っています。食料や救援物資を配るプロジェクトでは、避難所や他人の家に逃げてきた人たちに食べ物や歯ブラシなどを配ります。他に、包囲された危険な場所から出ることができなくて苦しんでいる人たちが、そこを管理している人たちから出てよいと許可されて出てきた時に、栄養ドリンクや毛布を配り、避難所を見つけて連れて行くこともあります。次に、給水プロジェクトというのがあります。シリアでは降水タンクや水道管など、給水に必要なインフラの半分以上が紛争により破壊され人々を苦しめています。シリア全土で断水や停電が続き、何日も水が手に入らないという状況が起きました。そこで、シリア赤新月社が、全国の水道局やさまざまなNGOと協力して、水道管の修理まで行っています。



この写真をご覧ください。ここは、ボランティアが水道管の修理をしているところです。しかし、現場では色々な困難があります。例えば、安全に行くことができない場所には、そこに水のない人たちがいると分かっても水を届けることができません。そんな時はとてもつらくなります。



2015年1～6月で  
20万人に「こころのケア」を実施



2015年1～6月で  
20万人に「こころのケア」を実施

次に心のケアの紹介をします。心のケアは、子ども、母親、若者を対象としたものがあります。こちらは、女性たちへの健康教室の様子です。皆さん、どうしてこのように女性たちに健康教室を開いているか分かりますか。実はこれは、栄養教室や、育児のアドバイスなどを通じて女性たちの不安を徐々に取り除いていき、周りの女性たちも同じように悩んでいるんだよ、1人じゃないんだと、心が疲弊してしまわないように、身近で参加しやすいテーマを設定し、紛争の中で不安の募る生活をしている女性たちに、心のケアをしています。



### 現在直面している課題

1. 脆弱な人びとのニーズに対応すること
2. ガソリンの不足
3. 事業を継続していくための運営費
4. 紛争の長期化と複雑化

シリア赤新月社には、今、説明した活動以外にもたくさんの活動があります。しかし、私たちが紛争下で活動する上では色々な課題もあります。主なものとして、四つの課題がありますが、特に病気の人や家のない人など、ぜい弱な人たちのニーズに対応することが重要です。私からは以上です。ご清聴、ありがとうございました。

**出 川:**ラガドさん、ありがとうございました。日本語も見事でしたね。それでは、もう1人、シリアからボランティアとしていらっしゃいましたラワン・アブドゥルハイさんをお願いしましょう。ラワンさんには、英語でプレゼンテーションをして頂き、通訳は日本赤十字社の柏倉さんをお願いいたします。

**ラワン:**こんにちは。ラワンと申します。シリア人です。6年以上前から、シリア赤新月社でボランティア活動をしています。お年寄りや親のいない子どもたちへの福祉活動をしたいと思い、ボランティア活動を始めました。そして、レバノンやイラクからの難民を助けていました。やがてシリアで内戦が始まり、それからのボランティア活動はとても危険なものになっていきました。でも、私は人々を助けたかった。どの活動もシリア赤新月社でなければできないものばかりでした。以前は、人が死んだと聞いただけで泣き、血を見るだけで怖くなる普通の人間でした。しかし、紛争が始まってからは救急隊として人々を助けるという使命感で続けています。危険を恐れず、紛争の中で人を助けていることを誇りに思います。

今からお見せる映像は、私が救急隊を始めた頃に、現場で撮影されたものです。その頃、私は血を流す人を見たり、死んだ人の体を触ったりできるか心配でした。



**ラワン:**救急活動の時は、いつも何も考えないようにしています。本当は、恐ろしいほどの血の匂いや苦しむ人の声があるのですが、そのような痛みや怖さを感じないように救急活動に集中しています。この活動を通じて、自分は血を見ても対応できるのだと知りました。しかし、救急センターに戻り救急車から降りたあとは、いつも血の匂いや死んだ人のことが蘇ってきます。それでも私は続けています。ありがとうございました。

**出 川:**ラワンさん、ありがとうございました。非常に印象深いプレゼンテーションでした。折角ですから質問をさせてください。映像に写っていた白いヘッドスカーフをした女性はラワンさんでしょうか。

**ラワン:**はい、私です。

**出 川:**これは、いつ、どのような状況で撮影されたものでしょうか。

**ラワン:**映像は2年ほど前に撮影されたもので、救急センターに助けを求めるコールで、爆発があったと報告が入りまして、ダマスカスのパルミア通りに出動した際のものでした。

私は3回目の出動で、救急隊員としてとても初期の頃の映像ですが、今、私はこのチームのリーダーとして活動を続けています。

**出 川:**ありがとうございます。非常に困難で、激しい内戦の現場で活動しているわけですね。危険を感じる時もあるかもしれませんが、それでも、ラワンさんがこの活動を続けて行くことのできる動機、思いはどんなものなのでしょう。

**ラワン:**私は人を助けることが好きです。そして、自分の国の目の前で起こっている状況の中で、何でもやらなければいけないと思いますし、人を助けるべきだと思います、続けています。

**出 川:**ありがとうございます。隣のラガドさんにも、同じ質問をします。なぜ、この活動を続けていくことができるのでしょうか。

**ラガド:**動機は、簡単な言葉で言うと責任感です。日本で東日本大震災を経験し、シリアに戻り今度は紛争の中で暮らしてみて、本当に黙ってられない、何かをしなければならぬと思いました。その時にシリア赤新月社が自分に適していて、最も良い組織だと思ったのです。自分の生活や将来より、他の苦しんでいる人の生活や将来を優先しようと思いました。

**出 川:**危ない目に遭ったことはありませんか。それから、この活動をやめたいと思ったことはなかったのでしょうか。



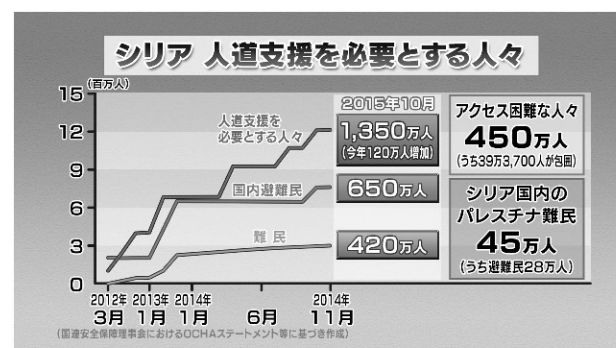
**ラガド:**何回もありました。私は普通の人間ですから、大変な目に遭うたび、怖くて何回も逃げ出したいくなりましたが、できるだけコントロールして、また、私が救急隊の活動をしなかったら、誰がするんだという思いでやり続けています。

**出 川:**ありがとうございました。お二人に、あらためて拍手をお願いいたします。  
(一同拍手)

## ②シリアと周辺の現状、子ども・女性たち

**出 川:**さて、シリア人権監視団というNGOによりますと、この一連の紛争、そして内紛が始まってからこれまでに亡くなった人は、少なく見積もっても25万人以上、そして負傷者は100万人以上とされています。この数字からも国内で支援活動が続いている人たちが、危険と隣り合わせの中、行っているということが分かります。さて、次に渡部さんにお話を伺いたいのですが、今支援を必要としている国内避難民の現状について、お願いいたします。

**渡 部:**はい。まずこちらのグラフをご覧くださいませでしょうか。

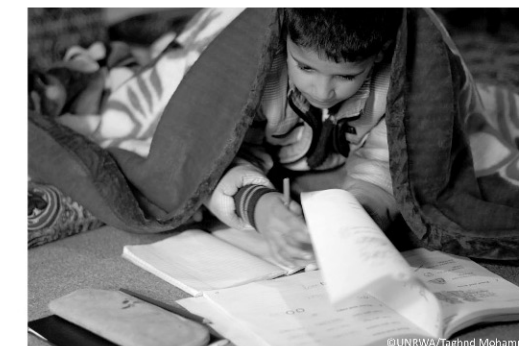


現在、シリアで、1,350万人もの人々が、今日そして明日の命を懸いで行くために何らかの支援を必要としています。その数は、紛争開始からご覧のとおり、右肩上がりです。今年だけでも120万人もの増加を見えています。ちなみに、この1,350万人という数字は、東京都の推計人口とほぼ同じ位だと承知しています。つまり、東京都民全員が、食料や医療などの援助に依存している。そういった様子を皆さんに想像していただければ、いかに多くの方が大変過酷な状況に置かれているのかをより身近に感じていただけるのではないかと思います。

そして、出川さんからお話がありまして、シリアからは、すでに420万を超える難民となった方々が国境を越えて祖国を離れました。ヨーロッパに到着する移民、難民にメディアなどの注目も集まっていますが、こうしたシリア難民の大多数は、依然としてトルコとかヨルダンといった周辺国で暮らしているわけです。

更に、皆さんに是非、忘れていただきたいのが、650万人にも上る国内避難民の存在です。さまざまな理由によって国外に逃れることができない、望めないという人たちが、その数は、実に国を離れた難民よりも多いのです。そしてこうした人々の中には、戦闘のたびに何度も避難先を変えて逃げているといった人たちも多くなります。大変残念なことですが、現在でも450万人もの人々に私たちは支援を十分に届けることができていません。特に39万3,700人の人々に対しては、戦闘で街が包囲されてしまっていて、支援が届けられない。あるいは、こうした人々自身が町から自由に出て来られないという極めて困難な状況に置かれています。電気や水道などの供給も、戦闘当事者の手によって止められているという悲惨な状況です。

最後に、シリア国内で支援を必要としている人たちの中には、シリア内戦が始まる以前からパレスチナ難民としてパレスチナから来て暮らしている人たちも45万人ほどいます。こういった人たちも支援対象として忘れてはならないと思っています。



**出 川:**どうもありがとうございました。そうすると、今、人道支援を必要としている人の3分の1にはアクセスができない、つまり支援が行き渡らない、そういう状態になっているということなのですね。

**渡 部:**そうです。

**出 川:**次に、今度は玉本さんにお話を伺います。玉本さんは、ジャーナリストとして、シリア、そしてその周辺国で避難生活を送っている女性や子どもに焦点を合わせた取材をなさっています。その具体的なお話を伺いたしたいと思います。

**玉 本:**はい。まずシリアとその周辺で撮影した写真をお見せします。2013年、14年にシリア北東部のハサカ県のカミシュリ取材したものです。



ここは、カミシュリ市の中心部なのですが、シリアでは内戦が広がると、住民の脱出が相次ぎ、このカミシュリ市内は、戦闘が起きていなかったため比較的安定してしまっていて、戦闘の激しい地域から、たくさんの住民が避難して来ています。

**出 川:**これはシリアの国の中で言うと、東の方ということになるわけですか？

**玉 本:**はい。北東部になります。そして、この写真は、主食のナンを買うために、朝の4時から住民たちが並んでいるところです。

**出 川:**小麦のパンのようなものですね。

**玉 本:**そうです。写真手前で女性が手を伸ばしていますが、これは主食のナンです。なぜ朝から並んでいるかというと、小麦が不足している。内戦で、輸送網が遮断されてしまうなどして物資が届かなくなります。そうすると、物価が高騰します。そういったことで、ナンの数が足らなくなり、市民は毎日毎朝2〜3時間並んでナンを買っていました。

次の写真はこのカミシュリに避難して来た住民たちです。



ここは、病院の跡地ですが、10家族ほどの方が暮らしていました。カミシュリの隣にあるデリゾールから、多くの避難民が逃げてきたということです。国外からの支援もなく、地元の貧困家庭に配る食料、米や油などを、こちらの人たちも、もらっているということでした。

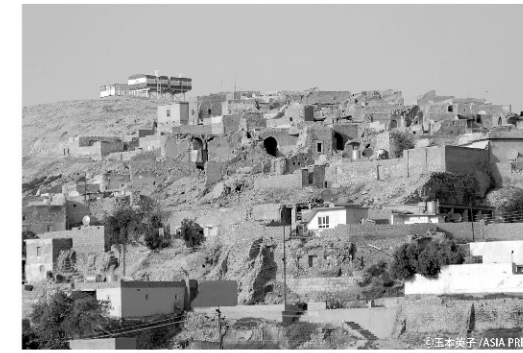
色々と尋ねてみましたが、この家族もデリゾールでの戦闘で家が破壊され逃げてきたのですが、カミシュリでも医薬品や赤ちゃんのミルクが手に入らないということでした。医薬品は、ほとんどダマスカスから運ばれて来るのですが、戦闘があつてなかなか物が届かず、薬の値段がダマスカスの2倍から3倍になってしまつて、人々が買うことができないということでした。

**出 川:**このデリゾールというのは、シリア東部の町ですが、ここでは、どういふ戦闘が起き、住民がそこから逃げてきているのでしょうか。

**玉 本:**このデリゾールの2013年の時は、政府軍と反政府勢力が戦闘を起こしていました。そのため、町に住んでいた人たちが巻き込まれて、家を失って逃げてきたということです。

**出 川:**次の写真は。

**玉 本:**次は、このシリアの隣にあるイラク北西部のシンジャールという町で、2011年に私が取材した写真です。皆さんも、ご存知のとおり、隣国のイラクでも、一部がIS(イスラム国)に支配されています。ここに暮らしているのは、クルド人の中の少数宗教、ヤジディの人たちで、ISからの迫害にさらされてきました。これは2011年に撮影した写真ですけれども、シンジャールとその周辺では、10万人位の人たちが暮らしているということでした。



**出 川:**このヤジディという宗教は、簡単に言うと、どういふ宗教なのでしょう。

**玉 本:**そうですね。ゾロアスターに近い宗教と言われていて、キリスト教やイスラム教などの影響も受けています。イラクやシリアなどを中心に30万人以上の方が暮らしていると言われていて、

**出 川:**過激派組織のIS(イスラム国)は、このヤジディという、少数派の宗教の人たちを敵視して虐殺しているという話も聞きますね。

**玉 本:**はい、そうです。これは、そのISが襲撃する2年前に撮影した写真です。結婚式ですね。式に300人ほどの村人たちが集まって来て、何も無い砂漠で、水の入ったペットボトルだけが配られる、そんな結婚式です。皆さんがお祝いして踊っている写真です。



しかし、この2年後、この町もISに襲撃されて、今、写真に写っている方たちが生き延びているのかどうかということも、まだ把握できていない状況です。昨年8月に、このシンジャール周辺にISが襲撃し、このシンジャールの人たちは、とにかく逃げなければいけないということで、多くが着のみ着のまま車で列をなして町を出て行っている状況です。



シジャールの隣町にクルド自治区があります。ここは、比較的安全なので、逃げられる人はここに逃げましたが、逃げられなかった人たちはIS(イスラム国)に捕まってしまいました。そして、男性はイスラム教に改宗しなかったという理由でその場で虐殺されました。これは、数百人以上と言われています。女性たちは、戦利品としてISに拉致されて、ISの支配地域に連れて行かれ、奴隷に、そして強制結婚をさせられました。



この女性は、20歳のアムシャさんです。彼女もISの支配地域に拉致され、戦闘員と強制結婚をさせられました。その2週間後、隙を見て息子さんと一緒に逃げ出して、たまたま地元の方の市民の方が助けてくれて、クルド自治区に逃れることができたのです。

**出 川:**つまり、ヤジディ教というその少数派の宗教を信じているという、それだけの理由で、そんなひどい目に遭うわけですね？

**玉 本:**そうです。この宗教は、いわゆる孔雀天使というのを一つの信仰の対象としていまして、そういったことから、悪魔崇拝しているとISは決めつけて殺害の対象にし、女性は奴隷、戦利品として連れて行かれたのです。



こちらのヤジディのご両親は、20代の娘さん2人が拉致され、ずっと探し続けていて、私が取材に行った時も、「私の娘を知りませんか、情報を持っていませんか」と聞かれました。

次の写真は、この2人の男の子、14歳のラグハブ君と10歳のガヤット君とそのお母さんです。女性だけではなく、この少年たちもISに拉致されて、2人は少年戦士訓練所に入れられました。そこではISの戦闘員になるため、銃の訓練や、特に14歳のラグハブ君は人の首を切る練習をさせられたということでした。彼らは本当に運良く脱走することができたのです。シリアから国境を越えて、トルコに逃げることができました。今はイラク側の避難民キャンプに住んでいますが、今も毎晩、悪夢にうなされると話していました。

**出 川:**本当に深刻な状況ですね。実際にご覧になって、一番感じたことは何でしょうか。

**玉 本:**そうですね。皆さん、奴隷という言葉聞いた時、今の時代でこういう言葉というのはあり得ないと思われるのではないのでしょうか。しかし、実際現場に行くと、彼女たちは強制結婚をさせられ、そして奴隷としてさまざまなことを、IS(イスラム国)の支配地域でさせられて、今も数千人の人たちが残っているとされています。そこからなかなか脱出することができない状況で、私も取材に行って、これが本当に今の時代なのかと非常に思い悩んで苦しんでいます。

**出 川:**国内避難民と言われる方々の中には、こういう、非常に深刻な境遇に置かれている人たちがまだたくさんいるということになるわけですね。

**玉 本:**はい、そうです。

**出 川:**渡部さん、こういう状況の中で、どんなことが頭に浮かびますでしょうか。

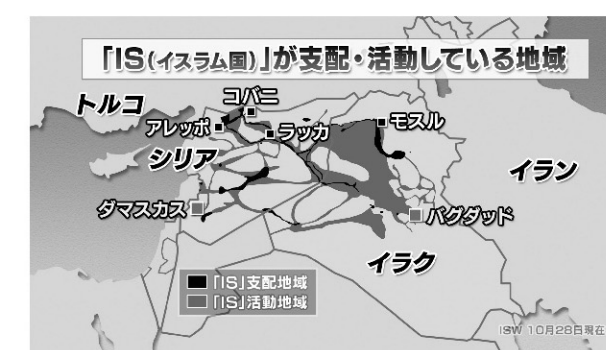
**渡 部:**そうですね。やはり、こういった深刻な状況について、これが国際法、国際人道法の違反、あるいは深刻な人権侵害であるということが、押さえておかなければいけないポイントではないかと思います。たとえ戦闘員であっても起きてはならないことであって、戦争にもルールがあるということです。特に、その一般市民を対象としたこうした行為。それから弱い立場に置かれた女性や子どもに対する行為というのは、断じて許されないものだと思います。

**出 川:**今、お話があった「国際人道法」とは、戦争、あるいは武力紛争でケガをしたり、病気になったりした兵士や捕虜、そして武器を持たない一般の市民の人たちの人道的な取り扱いを定めた国際法です。「国際人道法」という名前の法律は存在していませんが、さまざまな条約と、慣習法の総称が「国際人道法」とまとめて呼ばれているわけです。

他にもシリアのこれまでの内戦では、化学兵器、あるいはクラスター爆弾、あるいは樽爆弾といった非常に殺傷力の強い爆弾、あるいは兵器が使用されたという指摘があります。それから、異教徒、少数民族を大量に殺害するという話もあります。

さて、高橋先生にお伺いしたいのですが、シリアはなぜこのような状況に陥ってしまったのでしょうか。

**高 橋:**シリアで内戦が始まったのが2011年です。12年、13年、14年、15年と、5年間の内戦が、やはりこうした悲惨な状況を生み出したと言えると思います。その悲惨な状況の中で起こった事件の中でも、最も悲惨な、我々にとって不幸と言うか、シリアの方にとっても不幸なことは、やはり「イスラム国」、ISと呼ばれる組織が支配地域を広げて来たことだと思います。この地図をご覧くださいなのですが、大まかなISの活動地域、支配地域です。





このようにシリアとイラクに跨って活動をしているということです。ただ、昨年このイスラム国という組織が成立を宣言した直後には、イラクの首都バグダッドに迫って来るのではないかと、あるいはイラク北部のクルド人の自治地域の首都であるアルビールに迫って来るのではないかとというような観測さえあったのですが、私の見方では、とりあえずはその拡大の勢いは止まったと思っています。ただ、拡大の勢いは止まっても、これだけの広い地域、多分、面積的には現在でもイギリスより広いぐらいの地域を支配しているのです。ですから、その支配下にある方々にとっては大変な災害ということになります。

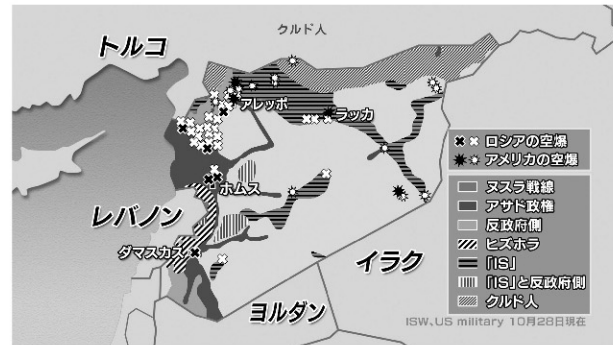
また、このIS(イスラム国)というのが、世界のイスラム教徒に、自分たちのところに来て一緒に戦うようにと呼び掛けています。一緒に来て戦えない人は、その場で、「ジハード」をやるようにと。つまり、平たく言えばテロをやるようにという呼び掛けをしているわけです。それに応えて、これまでほとんどそういう犯罪歴がない人やテロをやったことのない人が、突然テロをやるというような事件が世界で続いています。これを、1匹狼テロと言うのですが、非常に対策が難しい。組織で活動していれば、組織を追っていれば何とか防げますが、個人が、ある日コンピューターを見ていて、そだ、テロをやるうと言って立ち上がったのでは、治安当局の対応も非常に難しいという問題があります。

それからもう一つは、既にある世界中のさまざまな過激な組織が、これまではアルカイダに忠誠を誓っていたのですが、これも、このISの方が人集めがやりやすい、あるいはアピールがある、お金が集めやすいと、各地で次々とISに忠誠を誓うという動きを示しています。最近、シナイ半島でロシアの旅客機が墜落するという事件がありました。

**出 川:**エジプトですね。

**高 橋:**そうですね。私はこれは恐らくテロだと思います。やはり、エジプトのシナイ半島で長らく活動していた過激派組織が、このISに忠誠を誓って、そういう背景の中で今回の事件に繋がったと思うわけです。

次に、今日のテーマになっているシリアの地図をご覧くださいながらお話を続けます。



まず、シリアというのは、先ほどのお2人のお話で既に明らかなように、内戦状態でさまざまな勢力が入り組んで支配をしているという状況です。このシリアの問題が、今注目されているのは、もちろんシリアの方々が苦しんでいるということもあるのですが、一つは、シリアから難民の方がたくさんヨーロッパにやって来て、ヨーロッパ人もシリア問題は自分の問題ではないと思っていらなくなったというところがあると思います。そして、9月からロシアが軍事介入を始めたというのも、このシリアに注目が集まっている背景になっているわけです。

なぜ、この時期にロシアが軍事介入をしたのかということに関しては、さまざまな議論がありますが、私は一つだけ、軍事面からの分析を紹介しておきたいと思っています。

それは、現在、シリアのアサド政権が非常に苦境に立たされたからだという見方であります。アサド政権は、反政府側に比べて2つの面で優位に立っていました。一つは空軍を持っている。もう一つは大型の戦車を持っている。しかし、空軍も、もう5年間も戦っていますから、だんだんと消耗が激しくなっている。それから、アサド政権側の切り札とも言え

る戦車に対して、今年に入ってからアメリカ製の対戦車ミサイルが反政府側によって使われるようになって、シリア陸軍の戦車部隊の犠牲が大きくなった。このままでは、もしかしたらアサド政権の将来も危ないという判断があったので、この時期にロシアが軍事介入をしたのではないかと見方です。

**出 川:**高橋先生、ロシアにとって、シリアのアサド政権を支えることの意味を、どのように見たらよろしいでしょうか。

**高 橋:**はい。よく指摘されるのは、シリアのアサド政権は、ある意味ロシアにとっては、中東におけるほとんど唯一と言ってもよい同盟国ですからこれを失いたくない。特にシリアにロシアが海軍基地を持っているということが指摘されます。

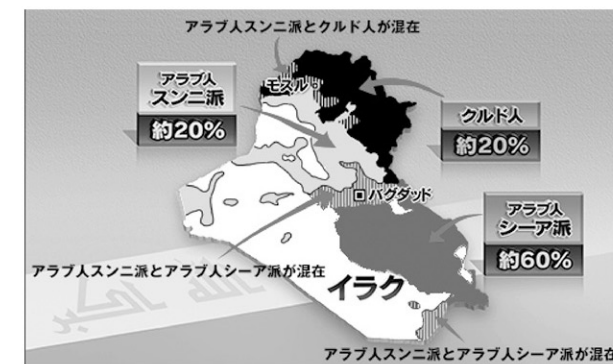
私は、それに加えて一つだけつけ加えておきたいのですが、ロシアという国はかつてのソ連です。ソ連は、アメリカと並ぶ超大国でした。アメリカがやっているのと同じようなことをやってきたわけです。例えばアメリカは、私もそうですが、奨学金を出して、世界中の留学生をアメリカに連れて来て教育をし、アメリカに理解のある世代を育てようとしたわけですね。私に関してアメリカが成功したかどうかは別問題ですけども。

ソ連も同じことをしてしまっていて、シリアからにして、エジプトからにして、たくさんの留学生を受け入れていたわけですね。特に軍の将校、パイロット、お医者さん、歯科医などがそうです。シリアから留学した若い方で、ロシアに行ってロシアの大学の寮に住んで、ロシア女性と熱い恋におちて花嫁として連れ帰った方が2万人から3万人いると言われています。ですからアサド政権下には3万人のロシア女性が生活している。そして、その子どもも入ると数万人のロシア系のシリア人がいるわけですね。そういった面から見れば、もちろん戦略的な計算もある、軍事的な計算もあるのですが、人の面でのロシアとシリアの関係の強さというのが、プーチン政権の介入の背景の1つの要因だと、私は考えています。

ですからロシアはIS(イスラム国)対策で軍事力を行使しているとは言っているのですが、実際にロシア軍が爆撃している所を見ますと、IS対策ではなくて、アサド政権を守るためではないかと思われるわけです。地図で示しましたが、ロシアが空爆している所を黒と白の×印で示しています。みんな、アサド政権の支配地域に隣接した地域。つまり、アサド政権にとっての最前線でこの爆撃が行われていて、ISの首都と言われているラッカなどにも爆撃は行われていますけれども、あくまでこれはISを攻撃するというアリバイ程度の爆撃と私は見ています。

そういう意味では、ロシアのシリアに対する介入は、アサド政権を守るためであると見ています。

そのようにして見ますと、今、シリアには、アサド政権の支配地域と、その他の地域、ISを含めさまざまな反政府勢力が支配する地域、そして北部のこの地図ではみ出てはいますが、クルド人が支配している地域、つまり玉本さんが、ご取材なさった地域などに大きく分けることができると思います。今回のロシアの介入の意味は何かと言うと、それはアサド政権がしばらく倒れないということだと思います。



次にISの支配地域があるイラクの情勢を見ておきます。イラクは、三つに大きく分けることができると思います。民族的には、南からシーア派のアラブ人の多い地域、そして中部のスンニ派のアラブ人の多い地域、そして、北部の違う民族、クルド人の地域ということになります。私も、北部のクルド人の地域は、3度訪れていて、3回目は玉本さんと一緒だったのですが、非常に





このコバニには10万人近くの人々が住んでいましたが、多くの人たちは隣国トルコに避難しました。しかし、2千人余りがまだ残っていて次の写真(右上)ですが、これは家の窓をコンクリートブロックで塞いでいるのです。ロケット砲が飛んで来るので、このようにブロック塀で塞いでいるわけです。電気はありません。何とか燃料を手に入れて、発電機を1日に1時間ほど回します。それで携帯電話の充電をしたり、テレビで情報を得たりしています。家の中は真っ暗でした。学校は閉鎖されていて、そのため子どもたちは家でじっとしているだけです。

この写真で、後ろのほうにあるのは食べ物の貯蔵庫。チーズやオリーブの実などを貯蔵していました。次の写真では、女性がお湯を沸かそうとしていますが、ガスもありません。



小型のコンロで食事を作っているところです。シャワーを浴びることができないので、この家庭は9人家族ですが、コンロでお湯を沸かして体を拭いていました。

コバニの住民は、地元組織のわずかな配給で命を繋いでいましたが、ちょうど私が取材した3日前には、IS(イスラム国)のロケット弾がこの近所に落ちて、12歳の男の子を含む3人の方が亡くなったということでした。

コバニの最後の写真ですけれども、これは、先ほども写真に写っていた、あの主食のナンを作っている工場です。なぜ真っ暗なのかというと、深夜にナンを作るわけです。



工場でナンを焼くと煙が昇ります。日中に作ると、攻撃対象になってロケット弾が撃ち込まれてしまうので、夜なら煙が見えませんが、夜中の2時とか3時に稼働します。そして、光が漏れないように窓はすべて塞いで、毎日市民のために1万枚のナンを焼くということでした。そのように厳しい生活を強いられています。

**出 川:**パンを焼くのも命懸けということですね。

**五 本:**そうです。日本とはかなり状況が違います。

**出 川:**そして、このコバニがIS(イスラム国)によって包囲されていたということですが、このコバニは、その後どうなっていますか。

**五 本:**今年の1月末に、ISが市内から撤退することによって、大きな戦闘はなくなりましたが、現在も周りはISの支配地域に囲まれている状況ですから、周辺地域での戦闘は現在も続いています。

**出 川:**ありがとうございます。このシリアの内戦が、ますます複雑化していく。先ほど高橋先生から説明していただいた地図を見ても、色々な勢力が、領土を取ったり、取られたり、しかも複雑な形に入り組んでいて、どこを誰が支配しているのかハッキリしないケースもあります。その深刻な戦争の中で、人道危機、あるいは国際人道法違反が起きているのですが、この「国際人道法」というのは、戦争が起きてしまった時に、被害者、あるいは犠牲者の苦痛をできるだけ和らげる、保護するというものです。国際人道法に違反する行為を、われわれは戦争犯罪と呼んでいます。

### ③紛争下での人道支援

**出 川:**さて、冒頭で2人のボランティアの方にシリアの赤新月社が行っている人道支援活動を紹介していただきましたが、この人道支援活動、他にはどのような活動をしているのか、ここからは渡部さんに説明していただきたいと思います。

**渡 部:**はい。まず人道支援活動の話に移る前に、私のほうからもアレッポの映像がありますので、ご覧いただけますでしょうか。



**出 川:**この、アレッポというのは、シリア北部にあるシリアで2番目に大きな都市です。世界遺産もある。そこで起きている出来事だと思います。どういう状況で撮影されたものなのでしょうか。



**渡 部:**この映像は、私どもOCHAにご協力をいただいているマーセル・メッテルジーフェンさんが撮影した映像で、我々の活動の一環ということで、今回紹介させていただきました。彼が映像をこういう形で撮影し目撃していることは、いわゆる非戦闘員の殺傷という、国際人権法違反や人権侵害にあたる行為が、すべての戦闘当事者によって行われているという、極めて深刻な事態が続いています。子どもを含む一般市民や、それから、今ご覧いただいたとおり、住宅の大変密集した所、あるいは、生活に不可欠なインフラへの意図的な攻撃というのが行われているわけです。こうした無差別攻撃の中には、住宅地だけではなくて、学校、あるいは病院といったところも標的になり続けています。



こちらのスライドにあるのですが、紛争が始まって以来、少なくとも313カ所の医療施設が攻撃を受けて、さらに679人の医療従事者が犠牲となりました。この他にも、これまでお話に出てきていますとおり、性的暴力ですとか、拷問、あるいは、子ども兵の強制徴用。これも全て人権侵害、そして国際人道法違反ですけれども、こういった行為が行われています。そして、人道支援活動自体や、こういった活動を行う要員に対する攻撃、あるいは嫌がらせ、政治的圧力、暴力行為といったものもありまして、これまでに、人道支援に携わる人々79名がそういったことによって命を落としています。このような非常に厳しい状況下にあるシリア国内で人道支援を行う際の最大のチャレンジは、どのようにしてこうした一般市民を保護して、それから人道支援を必要な場所に届けて、さらには同時に、我々人道支援要員の安全も確保していくかというところにあるのだと思います。

**出 川:**渡部さんの目から、こういう国際人道法違反の行為が行われている理由、動機というのは、どのようにご覧になっていますか。

**渡 部:**そうですね。大きくは二つあるのではないかと思います。一つは、戦闘を、その当事者にとって有利に進める手段の一環として行われている。恐怖心をみんなに与えることによって。

**出 川:**心理的に相手を。

**渡 部:**その地域を支配下に置くため、戦闘手段、ツールとして意図的に用いているということが一つ。もう一つは、こういった侵害行為が行われていても、それを即座に法の裁きにかけるといった仕組みが、なかなか上手く効いていない。不処罰と言うのか、処罰されない状況ということが続いていて、それがこういった行為の増加に拍車を掛けていると思います。

**出 川:**つまり、無秩序状態になっていて捕まえる人も、裁く人もいないから、やりたい放題になってしまっているということでしょうか。

**渡 部:**はい。もちろん国際法に則って、そういったことは、当然、説明責任、法的責任というのは問われなければならないのですが、今、即座の状況においては、実現していないというのが現実かと思います。

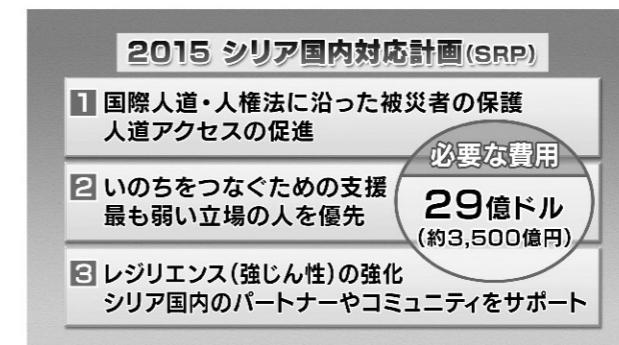
**出 川:**そして、こうした人道危機、あるいは国際人道法違反が行われている状況の中で、具体的にどのような人道支援が必要なのか、その点についてもご説明をお願いいたします。

**渡 部:**もう一度スライドをお願いいたします。こちらにありますとおり、現在、870万人の人々が生き延びていくために十分な食料を得ることができない。それから530万人の人々が雨露をしのぐための仮設の住居といった支援を必要としています。そしてさらに人口の70%の人々が、安全な水を手にするのが困難になっていて、さらには200万人を超える子どもたちが学校に行けないという状況にあります。



さらにこれに加えて、紛争の影響でシリア経済全体も縮小していますので、労働人口の半数以上が失業状態、そして人口の4人に3人が貧困層に属するといったような厳しい状態になっています。

こうした支援ニーズに応えるべく私たち国連機関、そして国際支援組織は、シリア国内対応計画、これは英語でSRP=シリア・レスポンス・プランと呼んでおりますけれども、人道コミュニティ全体として一丸となって支援にあたっていこうと決めて、この計画を立ち上げました。



このとりまとめは、実は私たちOCHAが担っています。こちらのスライドにその対応計画の主な内容が示されています。まず第一に、国際人道法、国際人権法に則った形で、被災されている方、避難されている方をきちんと護る、保護する。そして人道支援がきちんと届けられるようにするという。これまでの話に出てきていますとおり、女性や子どもたちなど、特に弱い立場に置かれた人々が、さらなる暴力とか搾取、差別、虐待から護られることを目指すということになっています。例えば、性的暴力への対応とか、その際の法的、心理的なサポート、あるいはバラバラになってしまった家族の追跡、そして子ども向けには地雷や不発弾のリスクに対する教育、そういったことも行われています。

第二に、もっとも弱い立場に置かれた人々を最優先して、先ほど触れましたような食料・医療・安全な水といった命をつないでいくための支援を届けるということもしています。

そして最後に、電気・水道・教育・通信あるいは燃料の供給といったサービス、インフラを持続的に提供していくために、行政とか公的機関の能力を補完強化することも同時に努めております。

これは紛争が5年にわたり長期化していますが、一方で戦闘の直接的な影響をそれほど受けてない地域も残されていて、国全体として紛争に負けない力、レジリエンスといいますが、その強靱性というものを高められるよう、人々の生業や地域が復興するための支援を行っています。

こうした計画を実際に実現するためには、総額で29億ドル、日本円にして3,500億円が必要になっているわけです。

次に、こちらのスライドをご覧くださいのですが、この地図は冒頭にご紹介した支援を必要としている方々のシリア国内での分布図です。そしてこの色が濃いところが、実際の我々のアクセス、支援を届けるという行為が極めて困難になっている地域を現しています。



このシリア対応計画を、私どもは、Whole of Syriaアプローチと英語で呼んでいます。日本語でシリア全体のアプローチということなのですが、シリア国内で活動している団体はもちろん、隣国から国境を越えてシリアを支援している団体というのにもたくさんあって、その数は270を超えると言われます。

**出 川:**270もの団体が何らかの形でシリアへの支援をしているということですね。

**渡 部:**そうです。こういった多様な団体を共通の枠組みの中に一つにまとめて、国境を越えてでも、最も直接的あるいは効果的に届けられるルートがあれば、そういったルートを通じてトラックを送り込んで支援する。そのための計画です。

特に2014年には、国連の安全保障理事会で、こういった国境を越えた支援活動を許すという重要な決議が採択されていますので、特にシリア政府のコントロール下でない地域に向けてこうした物資輸送というのをやっていて、実際にそれで届けられるようになった地域が増えてきました。

最近ではこの10月18日に、国連と赤十字国際委員会、そしてシリア赤新月社による共同作戦が行われまして、これまでは町が包囲されていてアクセスが困難だったイドリブであるとか、ダマスカス郊外といった地域にもトラック輸送が始まり、3万人もの人々にさらなる支援が届けられるようになってきています。

他方、既にお話に出ているとおり、ISを含め多くの武装組織が複雑に活動をしていて、また、情勢が刻一刻と変化していますので、国境をまたぐのは先ほどの話のように可能なのですが、戦闘ラインをまたぐオペレーションというのはますます困難になってきています。

さらには国境を越えたオペレーションをする際、シリア政府側からも承認手続きを取っているのですが、これらが留保されることによって、本来届けられる支援がなかなか届けられない、あるいは遅延するという課題にも直面しています。

**出 川:**そうしますと、この人道支援を進めていくための計画はあるけれども、なかなか計画通りに進めていくのは難しいし、さまざまな困難があるということですね。一番の困難はどんなところにあるとご覧になっていますか。

**渡 部:**一番の困難は、やはりアクセスです。戦闘が行われていて、支援要員の安全が確保されなければなかなか入っていけない。もちろん、赤新月社のボランティアの方からお話があったとおり、我々の仲間たちは現場で勇気をもって活動しているわけですが、それでも最低限の安全が確保されなければなかなかそこに入っていけない。入っていくためには安全を確保するように戦闘当事者とやはり交渉をしていかなければいけない。こうした交渉が、簡単にできるものではないということだと思います。アクセスできれば、計画があって、そしてその計画を支えるだけのリソース、資金があれば、届けることができると思っています。

**出 川:**またその支援をする人たちが武装勢力から敵視されて、意図的に狙われるということも起きるわけですね。

**渡 部:**はい。

**出 川:**高橋先生、人道支援を進めていくことも非常に困難が多いようですが、先生の目から見て、どのようにアプローチしていけばこの問題が改善していくとお考えでしょうか。

**高 橋:**難しいですね。一つは、ヨーロッパに出てくる難民の証言などを聞いていますと、要するに難民支援のために各国が拠出している金額そのものが、必ずしも十分なレベルに達していないという問題を指摘しておきたいと思います。

もちろんシリアの内戦が長く続くということで、支援をしてきた国も援助疲れというのがありますし、世界中を見渡せば地震もあるし、その他の災害もあるし、国際社会が直面している問題はシリアだけではないという冷たい現実もあって、なかなか十分な額がいき渡ってないというのが一つの大きな問題だと思います。

ただ、ほかの災害、ほかの地域もそれぞれの問題を抱えていますが、シリアの問題はもはやヨーロッパの問題になっていますので、ヨーロッパ諸国にも考え直していただきたいし、おそらく考え直しも進んでいるでしょう。では、シリアの国内に戻ってからどうするかという問題はありますが、その前に十分な額を手当てするということが、やはりこここのところの焦点となってきたのかなという印象を持っています。

**出 川:**今、現地にどういった援助活動、支援活動を行っているかという赤十字国際委員会の統計を見ると、物資の配布については、今年の1月から6月までの6か月間で車両、コンボイを組んで37回、実際に戦闘が行われているところに物資を運んでいます。

また、例えば食料の詰め合わせを10万セット、それから衛生用品、歯ブラシや石鹸、医薬品、これを1万5千パック運んでいる。これからシリアは厳しい冬を迎えて、非常に寒くなるのですが、去年の冬の段階で5万世帯に毛布、マットを配布したという、地道な活動が行われています。それはいずれも地元のボランティアによって支えられているということなのですが、玉本さんは赤新月社の活動も現地でも取材なさっているわけですね。

**玉 本:**はい。シリアのハサカ県、かなりイラク国境に近いマリキーヤのネウロズキャンプでヤジディの子どもたちにケアを、心のケアを行う赤新月社を取材しました。その時の映像があります。(※次ページ参照)

**玉 本:**お遊戯をしながら、子どもたちの心のケアをしています。私たちの苦しい心を助けてくださいというような言葉を話しながら、子どもたちがリポートするものです。

この子どもたちは全員、IS(イスラム国)の襲撃などを目撃していて、また、家族が殺された子どもたちも多かったです。シリアの国境に近いイラク側に住んでいたのですが、ISが襲撃してきて、近くの山に逃げ込み、その山をISに包囲されまし



た。その山は、草も木もなく水もほとんどないというところで、1週間、本当にわずかな水と少しの食料で、子どもたち、人々は何とか生き延びてこのシリアのネウロスキャンプに来たわけ。力尽きた老人や子どもたちもいたということで、先ほど子どもたちが話していた、お母さんが木に男の子の遺体を縛りつけていた、くくりつけていたという話は、その子どもが亡くなって、でも子どもを運ぶことができなかった。お母さんは山を下りて何とかシリア側に逃げたのですが、いつかは戻ってきて、この子どもをきちんと埋葬するために、後でも分かるように木にくくりつけたということなのです。

いま、子どもたちはシリア側にいますが、引き続き心のケアをとっても必要としていると聞いています。

**出 川:**玉本さん、紛争地、特にシリアやその周辺国を取材されていて、このような内戦や武力紛争の最大の犠牲者は、やはり子どもだと見てよろしいですか。

**玉 本:**そうですね。子どもと女性たち。特にこのヤジディの人たちは、これまでさまざまな迫害を受けてきたのですが、今回のIS(イスラム国)の襲撃、虐殺というのは、シリアやイラクの中の一歩の弱者が、徹底的に追い込まれたということなのです。

**出 川:**その人たちを護るために、何が求められているのでしょうか。

**玉 本:**本来であれば、自分たちの故郷に戻ることができたらと思うのですが、多くの人たちに話を聞きますと、やはり一度破壊されたコミュニティを元に戻すということではできず、村に戻ることができても、これまで近所にいたイスラム教の人、もちろんよい人だということは分かっているけれども、今後共存することは非常に難しいという話を聞きました。そういう人たちの多くが、いまヨーロッパを目指しているわけです。その理解と助けが求められていると思います。

#### ④国際社会の中のシリア、支援を終わらせる日はくるか

**出 川:**実際のところ、内戦でいちばん大きな深刻な影響を受けているのは、やはり子どもたちや女性、そういう弱い立場の人たちです。また、今、戦闘の対象、攻撃の対象として学校や病院も意図的に狙われているという現実がありますし、その中では大勢の子どもたちが犠牲になっています。そしてそういう子どもたちは、絶え間ない恐怖にさいなまれる。そして実際に自分の家族、あるいは友だちが亡くなる場面を目の当たりにするということもある。そうすると、心に深い傷を負う。先ほど、戦闘員にさせられた、戦闘員の訓練を受けた少年の話も出てきましたように、十代の少年に武器を与えて戦闘に参加させているという例は、実際に数多く報告されています。

それから子どもたちが、家計を支えなければならない、学校に通うことができない。働かなければならないという子どもたちが非常に多くなっています。

もう一つは、去年あたりから問題になっていますが、難民の少女たち、特に10代前半の女の子たちが「早すぎる結婚」を強いられるという問題もあります。シリア難民には、生活が非常に苦しい境遇に置かれている人が多く、親が生活のために、10代前半でも娘を嫁に出してしまうということです。

国連は、このままではシリアの子どもたちが、いわゆる「失われた世代」になってしまう、その結果、シリアという国そのものの未来が失われてしまうという警告を出しています。こうした現実を一体どうやって解決していったらよいかということ、ここから考えてみたいと思います。何と言っても、やはりこのシリアの内戦を終わらせなければならない。少なくとも停戦を実現させなければならない。まずそこにかかっていると思うわけです。そのためにはどうしたらよいか、まず、高橋先生からお願いします。

**高 橋:**2011年から2015年、5年間の内戦を通じて私は二つのことが証明されると思います。一つは、アサド政権は倒れなかったということです。それからもう一つは、アサド政権にはシリア全土を再び支配する力はないということです。この二つの現実を前にしますと、やはり一番現実的な解決策は、シリアの何らかの形の分割、あるいは連邦化というようなところではないかと思っています。

シリアの国民にとっては、国がかつての一体感をもった国でなくなることは非常に厳しい状況だということは想像に余りあるのですが、しかしながら、現実が現実であるだけに、この現実をどう受け入れていくのか。そして、どう国際社会の枠組みの中に落とし込んでいくのかということが、これから外交に課せられた課題だと思っています。

色々なプレイヤーがいて、それぞれの意見は異なっていますが、ただ唯一全ての関係国が主張していることは、ISのやっているようなことは許されないという、この一点に関してはほぼコンセンサスがある。

ですから、このアサド政権は倒れなかったという事実、アサド政権にはシリア全体を再度統一する力はおそらくないであろうという事実、そしてIS(イスラム国)以外のプレイヤーはみんなISがやっていることに対して批判的であるという、この三つの事実をどう外交で適切な形に落とし込んでいくかというのが、各国の指導者、あるいは各勢力の指導者に求められていることだと思っています。

**出 川:**新しい体制を作っていかなければ秩序はできないわけですが、そのための「政権の受け皿」というものが今の状況の中では、なかなか見えてきていないと思いますが、どういう形で秩序を作っていったらよいでしょうか。

**高 橋:**おそらく、今、交渉をして、すぐに明日から新しい平和な繁栄したシリアというのは望めないと思います。ですから、まず出来ることからやるしかないわけで、できることは何かというと、おそらくアサド政権と反アサド側の停戦だと思います。そして、その両者のエネルギーをIS対策に向けるというのが一番現実的な方法ではないかと見ています。

国際社会の大半が、ISも敵だがアサド政権も敵だという線を進めてきた結果、今の状況があるわけで、アサド政権と反アサド政権、両者にとってISが敵であるならば、どこかで停戦という落とし所が見えてきてもいいのではないかと考えています。

**出 川:**最初は、アサド政権対民主化勢力、あるいは反政府勢力という形で始まった紛争が泥沼化し、複雑化して、しかもISというプレイヤーが入ってきて、そして三つ巴になったと思ったら、今度は反政府勢力の中にアルカイダ系のイスラム過激派組織、「ヌスラ戦線」という名前ですけれども入ってくる。

どんどん構図が複雑になっていくわけです。そうすると、時間が経てば経つほど解決が難しくなってくる。これをどのように見ればよいでしょうか。

**高 橋:**確かに時間が経てば経つほど状況は複雑化してきたのですけれど、さすがにこれだけの間、戦いが続いてもアサド政権が倒れないという現実、全てのプレイヤーが受け入れていると思います。また、首都ダマスカスのアサド政権



も、自分たちがもう一度シリア全体をかつてのように支配することはあり得ないという現実を受け入れていると思います。今まで中東では、暗い話題、悪い状況ばかり目立っていました。しかしこの夏にはイランとアメリカを中心とする国際社会が核問題で合意しました。明るい展開です。それまでイランと立場上、口を利くことができなかったアメリカが、このシリア問題に関しても議論をすることができます。議論をすれば解決するという問題ではないですが、少なくとも罵り合いができるようになったということは大きな一歩だと見えています。

**出 川:** 渡部さんは国際人道支援という立場から、ずっとこの地域に関わってきたわけですが、渡部さんの目から、このシリアの問題を全体として見た時に、解決に向けた、あるいは問題を緩和していくアプローチがあるとお考えでしょうか。

**渡 部:** おっしゃった通り、シリアに今起こっている悲劇というのは、最終的には政治問題だと思いますので、やはり対話と交渉を通じて、何らかの政治的解決を見いだす以外に出口はないと思っています。

国連システムとしても、先ほど来、外交努力というお話が出ておりますけれども、潘基文(パン・ギムン)事務総長、それからデミストラシリア問題担当特使というプレイヤーを中心に、こういった政治外交努力も続いているところです。

一方で、少し注意しなければいけないのは、人道支援活動と、それからこういった政治的な性質の活動を、やはり明確に切りわけておかないと、事態がさらに複雑化する、あるいはもう既にさまざまな困難に直面しているわけですが、それがさらに難しくなるというような可能性もあります。

私ども、国連や赤十字が行っている人道支援活動が、中立性、公平性、独立性といった人道原則に則って実施される。このことが実際にシリア国内の被災コミュニティや関係者の間で、私たちの活動が受け入れられる前提条件になっていますので、先ほど、支援関係者が戦闘当事者の攻撃の対象になるという話がありましたけれども、やはりこの原則を貫かないとアクセスも実現しない、支援もできないというような問題に陥りかねない、それが悪化しかねないということです。

人道支援自体を、何かそれ以外の上位目標のための手段として位置づけたり、また先ほどから議論されているように、本来求められる政治外交努力の代わりを人道支援に期待したり、さらにはそういった努力を十分していないことを、人道支援をやっているという名の下に覆い隠すということは、やはり人道支援そのものの趣旨に反するのではないかと思います。

**出 川:** 今、大変重要な指摘がありました。赤十字というのは、あるいは赤新月社というのは、紛争解決、あるいは平和構築をする機関ではないと。政治的な立場はとらない。紛争の解決は、まさにこれは政治が行うことであって、そのことは国連や国際社会、あるいは周辺国に任せて、赤新月社や赤十字社はあくまで犠牲となっている人たちに救いの手を差し伸べる。それが使命ということですね。

**渡 部:** はい。

**出 川:** 玉本さんはジャーナリストの立場から、このシリアの人道危機に向かい合っているわけですが、玉本さんの目から見て、この問題を全体としてどういうアプローチをとっていったらよろしいでしょうか。

**玉 本:** 私は、ほぼ毎日シリア国内の人たちと連絡をとっています。今も、皆さんご存知のように、毎日のように多くの方が亡くなっています。人々は、自分たちが見捨てられたのではないかと、世界に見捨てられたのではないかと感じている人が多いようです。さまざまな努力すべきことがありますけれども、やられたらやり返す、今この繰り返しになっていて、それを何とか止めなければいけないと思っています。

IS(イスラム国)に関しては、以前、私がシリア北部で取材した時に、クルド組織がISからの押収物を見せてくれたのですが、色々な国のパスポートが出てきました。ISの戦闘員が残っていたパスポートで、全てトルコの入国スタンプが押してありました。特にシリアの北部地域だったということもありますけれども、隣国から今もどんどん外国人戦闘員が入

ってきている状況です。ですから、何とか外国人戦闘員が入らないようにする、武器を渡さない、そうした努力も国際社会はすべきではないかなと感じています。

**出 川:** お話を伺ってみますと、そのシリアの問題を全体として見た時に、一つは、やはり内戦を終わらせる取り組み、少なくとも停戦を実現するための政治的な交渉、取り組みが必要で、もう一つは、それをずっと待っていると、その間、大勢の人たちが犠牲になってしまう。だから人道支援もそれとは別にやらなければならない。これら2つを車の両輪として進めていかなければならないという、そういう構図が見えてくると思うのですが、高橋先生、その点いかがでしょうか。

**高 橋:** 全く同感です。外交か人道支援かではなく、外交も人道支援も、あれもこれもであって、あれかこれかではないと思います。外交努力はしっかりやっていただきたいし、人道支援もやはりしっかりやりたいということで、それでわざわざこうしたシンポジウムを開いているわけですから、その両輪をしっかり回していきたいと思っています。

**出 川:** そのためには、できるだけ多くの方々に、このシリアという国、そこで暮らしている人たち、そこから脱出しなければならぬ人たち、その人たちに對する関心というのをずっと保っておく必要がありますね。

**高 橋:** そうです。ですから、NHKでもずっと報道を頑張っていたいただきたいと思ひますし、私もメディアなど機会があれば、シリア、シリアと繰り返し訴え続けたいと思ひます。

## ⑤ 会場からの質疑応答

**出 川:** 議論がだいぶ白熱してきたところで、今日は大勢の方々に会場にお集まりになっていただいていますので、折角ですから会場の皆様からパネリストの方への質問を受けたいと思ひます。手を挙げていただいた方の中から私が指名いたします。

一番前に座っていらっしゃる男性の方、お願いいたします。

**男 性:** 20代の会社員です。

約2時間、現場を知っているラワンさんとラガドさん、そして現場を見てきた現場の方々の声を聞いてきたパネリストの皆さんの話を聞いて、ただやみくもに募金をするのではなく、そういう状況を知って、納得して募金をするのが大事だと思ひました。

今後、赤十字、赤新月、各関係者の方々には今後も変わらず責任をもって救援物資、支援物資を届けていただきたいと思ひました。

最後に、こういう難しい仕事をしているパネリストの皆さんは、何か信念、信条がないとこういう仕事はできないと思うのですが、皆さんの中でブレないものがあれば教えていただきたいです。

**出 川:** 今、この仕事を続けている動機、ブレない信念ということですが、それではお一人ずつ、渡部さんから順番に一言ずつ答えていただければと思ひます。

**渡 部:** 難しい質問だと思いますが、私がこの業界といひますか、人道支援に足を踏み入れるきっかけになったのは、中東ではなくて、実はボスニア紛争です。クロアチアに逃れてきたボスニア難民のキャンプで学生の時にボランティアをし

たことがありました。子どもたちと一緒に遊ぶだけのボランティアだったのですが、生身の人間と接して思ったのは、どうしても難民というラベルを貼ってしまうと、その人たちが持っている私達と何も変わらないその人間性。つまり、難民となった人たちにも家族があり、恋人や友人がいて、それぞれ一人ひとりの人生があるということが消えてしまいがちになるのですが、そうしたことを人間同士の交流を通じて直接感じるような経験をしました。

そのことがどうしてもずっと心に残っていて、この仕事を今まで続けているというような背景があります。これからもそういう思いをずっと持ち続けていきたいと考えています。

**出 川:**次に、玉本さんは、このような紛争地取材をキャリアの最初からなさっていたわけではないと伺いました。その辺も含めて、どのような動機で始められたのでしょうか。

**玉 本:**私は最初、デザイン事務所で働くOLだったのですが、クルド問題に興味を持ったことから現地に行き、さまざまな人に教えていただきながら現場に通って、20年ほど経ちました。その中で、状況はほとんど変わらない、そしてますます悪化していると思います。特にヤジディの人たちの取材を2004年から始めていて、その頃は文化的なことなどを取材していましたが、現状は悪い方向に向かい、私の友人の中にも、今も行方不明だったり、殺されたり、そういう人たちが出ています。そのように危険地域ということもあるので、現地の人たちから情報を得て、十分に注意して取材を続けていますが、やはりこれは伝えなければいけないことだと感じています。ですから、取材の相手だからというよりも、友人たちが今も苦しみの中にいる、それを何とか伝えたいと思っています。

**出 川:**高橋先生はいかがでしょう。

**高 橋:**私は結構ぶれているので、ぶれないと言ってよいか分からないのですが、これだけメディアに出していただく、どうしても人にウケることを言いたいと思うのですけれども、ウケなくても大事なことは何かと考えて話したいと心掛けています。

私も、最初に学会へデビューしたのはクルド問題に関する論文で、1980年代に、本人としてはすごくよい論文を書いたつもりでいたところ、ある人に、「高橋さん、いくら速い球を投げたってキャッチャーが構えているところに投げないとストライクにはならないですよ。そんな誰も興味がないことをやってどうするのですか?」と言われてしまいました。しかし、だんだん興味のほうが私のほうについてくるという、ストライクゾーンが移ることがあるわけです。ですから、やはりウケようではなくて、大事なこと、好きなことをやるのが重要だと思っています。

**出 川:**ありがとうございます。

それでは次のご質問を一番前に座っていらっしゃる女性の方をお願いいたします。

**女 性:**アッサラーム・アレイクム。これはアラビア語で「こんにちは」という意味の合図です。どういう意味かという、あなたの上に平穏が訪れますように、というアラビア語でいう挨拶になります。なんと深い言葉でしょう。私は、アラビア語を勉強した時、その言葉、挨拶から始まるこのイスラムの本質、その本質の中に全てを許容するというものを感じて、これまでIS(イスラム国)の問題について心を大変傷めて苦しんで参りました。

ですが、今日、こちらに向いてまいりまして、とても安心しています。何故ならば一筋の光を見た思いがしているからです。私は、トルコを訪れたこともあります。東京の代々木上原にある東京ジャーミイという東京唯一のモスクの司教さまに、いつもこの問題をどうしたらよいのかという質問をしてきました。それは今答えることができない、彼はいつもそう答えていました。

でも、今、パネリストの皆さんの言葉を聞いて、ここから何かが、私たち一人ひとりが何かができるのではないかと、そうい

う一つの希望を持つことができました。

私たちにできる一つひとつの小さなこと、また大きなこと、ミドルクラスのこと、どんなことでもよいので、私たちができ得ることを教えてください。

**出 川:**なかなか難しい質問だと思いますけれども、市民の立場からできることは何かというテーマで皆さんお答えください。

**渡 部:**そうですね。募金の話が出ましたので、やはり資金面でのサポートということを私から申し上げたいと思います。今日、ご紹介したシリア国内対応計画ですけれども、現時点で必要総額の約37%しか集まっていません。ということは、このままですと、いま現在、私たちがアクセスできる、そういった地域の人々のニーズすらも十分満たすことができないということ。やはり資金面でのサポートというものを継続、あるいは更に拡大することが大事だと思いますし、そのためには皆さん、一人ひとりのご理解とご支援というものが不可欠だと思います。

**出 川:**ありがとうございます。玉本さんはいかがでしょう。

**玉 本:**そうですね。今日のシリアの現状を知り、同じ時代に生きるものとして、私たちがどう自分に引きつけて考えていくかということ、それぞれが考えたことをしていく、そういうことができたらいいのではないかなと考えています。

**出 川:**高橋先生。

**高 橋:**それはもちろん日本赤十字社とNHKたすけあい募金にふるってご賛同いただくということが何よりです。それからもう一つは、やはり中東のニュースを見るということをしつかりやっていたいただきたいと思います。私、各局のプロデューサー、偉い方とお話する機会があるのですが、高橋先生、中東の番組をやりたいけれど、視聴率がついてこない会議で提案が通らないのです、と嘆く人がたくさんいますから、是非、NHKも含め、各局に中東のニュースが見たいというメールを送ってくだされば、我々もテレビに出られますし、中東理解も進みます。皆さんは、テレビは見るものだと思っていらっやと思うのですけれども、テレビ局って、手紙を書いたり電話をかけたりメールを送るとちゃんと統計をとっていて、対応してくださいます。ですから、是非中東のニュースをもっと流すように、誰が離婚したっていう話は要らないじゃないかという抗議の電話を各局にかけていただきたいと思います。

(一同拍手)

**出 川:**それではもう少し質問を受けたいと思います。

**男 性:**渡部所長に質問です。先程SRPの3,500億円の話がありました、いわゆる各国政府からの拠出金が中心になるのでしょうか。またその場合に、日本政府の今のスタンスはどうなっているのか、そのあたりをお伺いできればと思います。

**渡 部:**おっしゃった通りです。SRPという共通の枠組みのもとに、国連がとりまとめを行って、その計画に対して各国政府から拠出金を募っていく。そのお金がSRPに参加している国連機関や市民団体等に分配されるという仕組みになっています。

もちろん日本政府からもSRP、それから周辺国の難民支援に対して、重要なドナーとして資金的な協力をいただいているところです。

**出 川:**ありがとうございます。それではこちらの男性の方をお願いいたします。

**男 性:**貴重なお話をありがとうございました。高橋先生から、シリアの根本的な解決は、シリアの分断かもしくは連邦をつくるという形が現実的ではないかというお話がありましたが、それを聞いているラガドさん、ラワンさんの気持ちを思うと本当に胸がいっぱいになりました。

実際に、渡部さん、玉本さんは、どのようなシリア問題の解決をみているか、または望まれているか、もしくは取材の中で、シリアの現地の人たちがどういふ解決を望まれているかという声を聞く機会がありましたら、お伝えいただければと思います。

**出 川:**ありがとうございます。それでは渡部さんと玉本さんに一言ずつお願いいたします。

**渡 部:**繰り返しになりますが、私は国連の中でも人道支援を中心に仕事をしていますので、既に申し上げた通り、何らかの政治的な解決が必要だという点に留めたいと思います。その最終的な姿、そしてシリアの運命は、やはりシリアの方々が決めていく。それを国際社会として、国連として、関係国として支えていくということに尽きるのかなと思っています。

**出 川:**ありがとうございます。玉本さん、お願いします。

**玉 本:**非常に難しいご質問だと思います。私もシリアの友人たちといつも連絡をとってそのような話をしますが、彼らが言うには、彼ら自身もどうしたらいいのかわからないと言っています。これは、もちろん国際社会のさまざまな問題もありますが、シリア人自身にも問題があったのではないかと、そのように話す人たちも少なくないのです。彼らにこういうことを言わせてしまうというのは本当につらいことですが、それほどに現状は厳しくて、私自身も現場にいて、どうすれば本当の解決になるのかわからないというのが正直な感想です。

ですから、私たちにできることは、もちろん国際社会が解決するようにきちんと見ていくことも大事ですが、それだけではなく、私たち一人ひとりがシリアのことを忘れない、彼らを見捨てないということが必要ではないかと思っています。

**出 川:**ありがとうございます。それでは質問をもう1問だけ受けます。

**男 性:**今日は貴重なお話をどうもありがとうございました。特に、シリア情勢、非常に絶望的だと思っている中で、高橋先生の示す明らかに最低限の合意ができるような状況が出てきたのではないかというお話に、少し希望を見出しました。

質問は、話が変わりますが、日本におけるシリア難民の受け入れ状況や、日本でのシリア人に対する支援活動について、少し教えていただければと思います。特に指名はありません。

**出 川:**可能であれば渡部さんから。

**渡 部:**国連機関の中では難民高等弁務官事務所、UNHCRというのが難民に対するその保護と支援の役割を与えられておりまして、私どもOCHAは、主に今日話題に上がっている国内避難民の保護と支援、そしてそのためにさまざまな関係者をとりまとめる役割をしています。そのことを前提として、UNHCRが日本政府とそういった話をしていると承知しております。

一般論として申し上げますと、迫害や紛争を逃れて、その国を離れ、難民として保護と支援を必要としている人たちに對して、必要なものを提供するということが、国際社会のメンバーとして、日本も含め約束していることですので、その上ですべきことをしなければならぬ、またもっとできることがあるのではないかと考えています。

**出 川:**玉本さん、高橋さん、いかがでしょうか。

**玉 本:**そうですね。日本に難民申請をしたいという人たちがいれば、やはり受け入れていく、前向きに考えていくべきだと思います。しかし、社会のシステム、宗教も言葉も全く違う、そういった人たちを受け入れていくということは、政治的に色々な問題を解決していかなければならないこともありますけれども、やはり私たち一人ひとりが自分のこととして、では、彼らをどうやって仲間として受け入れていこうかということを考えていかなければならないのではないかと考えています。

ただ、私の友人たちも含め多くの人は、ヨーロッパを目指しています。なぜかというと、親戚などが既にドイツやスウェーデンなどに難民として行ったり、移民として行った人が非常に多く、一方日本はやはり非常に離れた国なので、なかなか一般のシリア人には想像できないのです。ヨーロッパは時差も少ないですし、帰ろうと思えば数時間で帰れます。そのため、多くの人たちが欧州を目指しています。

そこで、そういった人たちを何とかフォローしていく、その国々をフォローしていくということもとても必要なことではないかと思っています。一番大事なこと、大切なことは、彼らがどうやったら幸せになれるのか、どうしたら自分たちの国に帰れるのかを始めに考えていったほうが良いのではないかと私は考えています。

**出 川:**高橋先生、お願いいたします。

**高 橋:**私が申し上げたいことは二つあって、一つは、難民を受け入れるのは、経済的な負担だという議論なのですが、もちろん短期的には負担になるのですが、長期的にみれば、難民というのは概して非常に良く働く人たちです。今、アメリカを旅行して、雪が降ろうが雨が降ろうが必ず開いているおみやげ屋などの店は大抵ベトナムから来た人がやっている。非常に、やっぱり皆さん働く。それから、難民を受け入れるということは、新しい才能を受け入れるということで、例えばアメリカの歴史を見ますと、キッシンジャーという人はドイツからの難民ですし、オルブライトという人はチェコからの難民ですし、難民の受け入れというのは才能を受け入れることだと、積極的に考えてもよいのではないかと気がします。

ですから、今ドイツは大変だと思うのですが、この難民問題を抱え込んだことによって、ドイツが解決するであろう問題の一つは、ドイツの少子高齢化の人口問題です。長い目で見たらドイツ経済は、フォルクスワーゲンのスキャンダルにもかわらず、また、力強く走り出すのだと私は確信しています。

そういう意味では、難民と言うと、外国人がたくさん来て不安だと言いますが、例えば横浜という町の魅力は、中華街がなくなったらかなり消えてしまうと考えると、違う文化・文明を持った人がやってくることは、やはりその社会を豊かにするのだという発想があっても良いのではないかと思います。

たまたま今回は問題がシリアですから、シリアの人は遠いから来ないかもしれませんが、次にどこか日本の近くで起こった時、日本は受け入れる用意があるのか。今度は遠くないところから日本に来たいという人がたくさんいた時に、原則として受け入れないという姿勢は、国際的には全く受け入れ難いのです。日本の文化は独特だからと言います。しかしドイツの文化だって独特だし、オーストリアの文化だって独特だし、トルコの文化だって独特です。にもかかわらず各国が何百万人の難民を受け入れていることを考えると、積極的平和主義というのは、外に向かうばかりではなくて、内側にも向かうべきです。日本も、もう少し度量の広い、違ったものを寛容に受け入れる方向に走るのが、本当の積極的平和主義ではないかと思っています。

**出 川:**どうもありがとうございました。

皆さまの質問のお陰でパネリストからも色々な発想、提言が出てきました。そして今日は、折角、シリアから二人のボランティアの方がいらっやっていますので、最後にこの二人から皆さんへ、メッセージを一言ずつお願いしたいと思います。それではラワンさん、ラガドさん、二人とも一緒にステージにおいでください。

まず、ラワンさんからお願いいたします。



## ⑥ シリア赤新月社ボランティアのメッセージ

**ラワン:**私の友だち、モヒのことを紹介したいと思います。彼は私たち救急隊の仲間、最近婚約者ができたばかりでした。ある日、夜勤の当直が終わって家に帰る前に、救急センターで仲間と話をしていました。その時突然、目の前で爆発音を聞いたので、彼は現場へ駆けつけました。そこには傷ついた人たちがたくさんいて、救護活動を始めました。ところが、そこに次の爆弾が爆発し、彼はその爆弾に当たり深い怪我を負いました。

その時、私たちチームは救急センターにいて、現場を見ていましたが、銃撃戦が続いていて入ることができませんでした。そして、入ることができるようになり、彼のところに駆けつけた時には手遅れで、亡くなってしまいました。彼は本当にいい仲間でした。

私たちは、このようにしてこの5年間で48人の仲間を亡くしました。これはその中のたった一つの話にすぎません。このように私たちの生活は危険と隣り合わせです。毎回、救急活動から帰ってくると、私は悲しい気持ちと、自分たちの活動への誇りと、使命が入り混じったとても複雑な気持ちになります。

それでも私は救急活動を続けます。人を助けることが好きです、目の前で起こっている状況の中で何かしなければならぬと強く思います。ですから、人々を助ける。これが私の生き方です。

少し付け加えたいことがあります。私たちシリア赤新月社、そしてボランティアたちは、原則に基づいて活動をしています。その中には中立という原則があります。私たち、シリア赤新月社、そしてボランティアは、通常、政治の話や宗教の話をしません。私たちは、その状況で人々にとって何が起きているのかということに注目してほしい、そういう話をしてほしい。

今回のシンポジウムでは、政治的な話がありました。それは、シリア赤新月社の見方とは違います。パネリストの前でこのような話をするに対して申し訳ないのですが、そういう違和感を感じています。

**出 川:**分かりました。ありがとうございます。我々もシリア赤新月社の役割、赤十字の役割や原則を十分理解しています。シリア全体の問題とは区別して考えています。どうぞ心配しないで下さい。それでは最後にラガドさんにもお願いいたします。

**ラガド:**本日はどうもありがとうございました。私は、日本に留学していた時、東日本大震災に遭いました。何かボランティア活動に参加したいと思い、気仙沼に行きました。

そこで全てのものを失った人たちの姿や道に倒れた家を見ましたが、その景色は今でも本当に忘れられません。家の片付けの手伝いをしていた時、流された家族の写真を見つけ、それをきれいにしてその家族に渡すと、涙を流してありがとうと言ってくれました。

その後、私がシリアに戻ると、戦争が既に始まったところでした。その時のシリアと気仙沼や日本で見た色々な景色がオーバーラップしたのです。だから、何かしなければと黙っていられなくなり、色々な組織を探したところ、シリア赤新月社の中立という原則を知り、入りたいと思いました。

シリアに戻った時、私が知っているシリアと、そしてシリア人は、全然違う国、全然違う人のようでした。今までシリア人は、あまり政治や宗教についての違いを考えず、本当に皆が友達のように仲良く暮らしていましたが、戦争が始まってからは皆ずっと心配しています。

例えば私は、周りの友達の本当の主義は今まで知らなかったのに、戦争のせいで知るようになりました。ですから皆さんには、戦争前の本当のシリアとシリア人のことを知ってほしいのです。

そして私たちを忘れないでください。それだけです。ありがとうございました。

**出 川:**ラワンさん、ラガドさん、本当にありがとうございました。二人の献身的な活動はこれからも続くということだと思います。彼女たちこの二人の無事を祈って、そしてシリアに再び平和の日が訪れることを願って、会場の皆さんと一緒に拍手で二人を見送りたいと思います。どうもありがとうございました。  
(一同拍手)

## ⑦ 私たちにできること・まとめ

**出 川:**さてそろそろまとめに入ります。

最後にパネリストの方に、一言ずつメッセージをお願いいたします。

**渡 部:**今日難民の話も出ましたが、国境を越えて保護を求めている人たちに加えて、やはりシリアの国内で人道支援を必要としている人たち、それから国内避難民と呼ばれる人たちのことを、決して忘れないでほしいというのが私からのメッセージです。



この写真は、10月31日に、国連のバン・ギムン事務総長と赤十字国際委員会のペーター・マウラー総裁が共同会見を開き、国際社会に向けて異例の警告を発している会見の様子です。この際、シリアだけでなく、同じような困難に直面する中東で、イラクやイエメンといった国々についても、国連と赤十字が声を合わせて、日本を含む全ての国々に対して以下の六つのことを求めています。

一つは、先ほどから話に出ている紛争解決のための努力。二つ目が、国際法を遵守するために、やはり戦闘当事者に影響力を行使してくださいということ。三つ目が、一般市民に対する攻撃といった国際人道法違反を非難してくださいということ。四つ目が、人道アクセス、人道支援を届けられるようにすることの確保と、人道支援要員を保護すること。そして五つ目が、難民と国内避難民への支援、保護、さらにはこういった避難民を受け入れている国々、そうした地域を支援すること。そして最後に、人口密集地で爆発性の武器を使用しないということでもあります。

国連も創立からちょうど70周年を迎えるわけですが、シリアの人道危機という深刻な事態によって、今、国連に対する信頼も問われかねないという事態に至っていると思います。

私たちがシリアで今起きていること、特に一般市民に対して起きている悲劇を、国連の安全保障理事会などに報告し、その影響力を用いて、安保理としても一致した行動をとっていただくように求め続けています。

こうした中、日本は、その安保理の非常任理事国に選出されたわけですので、是非ともこのシリアの人道危機に対して、安保理メンバーとしても責任を果たしていただきたいと思います。国連というのは、私たち日本も含めて、加盟国政府が

構成するものですので、そしてその加盟国政府というのは、その国の国民、すなわち私たち一人ひとりを代表しているということを、このシリア危機を通じて改めて私たち一人ひとりが考えなければいけないのではないかと考えています。

**出 川:**どうもありがとうございました。それでは玉本さん、お願いいたします。

**玉 本:**はい。難民について、難民は豊かな国で働きたいからやってくるのではないかという偏見があります。しかし、今日の Aleppo や Kobani の写真や映像をご覧になって、皆さん、どう思われましたか。ほとんどの難民は、生まれ育った家を失い、故郷を捨てて逃げてくる人たちです。まず、こうした誤解を解いて、難民がなぜ生まれて、そして戦争を引き起こさないために国際社会がどうすべきか、そして私たち一人ひとりがどうすべきかということを考えていくのが大切ではないかなと思います。

**出 川:**ありがとうございます。高橋先生、お願いいたします。

**高 橋:**国際政治を考える時に、私が皆さんにいつも求めているのは想像力です。もし自分が難民だったら、今日、この会が終わって帰るところがなかったら、どういう気持ちになるだろうかということ。自分が難民だったら自分がシリア人だったら、あるいは自分がアサド大統領だったらどうするだろうか、自分がブーチン大統領だったら何を考えているだろうかという想像もあるかもしれません。今日は、本当に一瞬でもよいので、是非自分が難民だったらどうだろうかというのを想像して、それぞれの立場からこの問題の解決にお力添えをいただければと存じます。ありがとうございました。

**出 川:**ありがとうございました。

会場にお集まりの皆さま、2時間を越える長いシンポジウムになりましたが、ご静聴いただきまして本当にありがとうございました。

シリアの内戦の終結、停戦の実現には相当長い時間がかかることを覚悟せざるを得ません。その間、残念なことにおそらく犠牲者はまだ増えると思います。ですから、今は、本当に人道危機への対応を真剣に、最優先に考えるべき時だと思います。そしてシリアではまもなく厳しい冬を迎え、とてつもない悲劇が目の前に迫っています。一人でも多くの命を救うためにはどうすればよいのか。そういう発想に立って最も有効な対策を国際社会全体で立てていかなければならないのですが、今日は私たち一人ひとりが一体何ができるのかということを考える機会になったとすれば、このシンポジウムは一つの目的を達したのではないかと思います。

皆さん、本当にありがとうございました。

(一同拍手)

発行日 2016年2月  
発行元 日本赤十字社  
Email:kokusai@jrc.or.jp